Rikkyo Psychological Research
2022 Vol. 63-64, 1-4

博士学位論文要旨

母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響
――量的・質的アプローチ――
（2020 年 3 月博士学位授与）

立教大学現代心理学部　　赤木　真弓

The Influence of Mother-Daughter Relations on Daughters' Identity
—Qualitative and quantitative approaches—

Mayumi Akagi　(College of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

本研究では，親子関係の中でも母娘関係の繋がりの深さに着目し，母娘関係が娘のアイデンティティ形成にどのような影響を与えるのかについて，量的，質的側面から明らかにした。母娘関係尺度を作成して，クラスタ分析により量的な側面から分析するとともに，アイデンティティという概念をより深くとらえるために伝記研究法による質的分析を行った。さらに，質問紙調査と伝記研究法を組み合わせた，新たな分析手法を構築し，異なるタイプの母娘関係の比較を，量的，質的に検証することを試みた。

第 1 章においては，青年期における親子関係という視点から親子関係研究について概観したうえで，親子関係の中でも特に繋がりが深いとされる母娘のアンビバレンツで複雑な関係性に焦点をあてた。さらに，母娘関係を類型化して検証した研究について，その意義と限界について述べた。次に，アイデンティティ研究の手法に着目し，量的研究，質的研究，それぞれの手法の長所，短所について概観した。

第 2 章では，大学生の女性を対象とした質問紙調査を実施した。母親と娘の関係性を多角的に検証するための尺度を作成し，その下位尺度を用いてクラスタ分析を行った結果，「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」に類型化された。得られた類型について，分離と結合，および精神的健康の視点で分析した結果，「自立群」が健康な分離タイプ，「反発群」が不健康な分離タイプ，「親密群」が健康な結合タイプ，「葛藤従属群」が不健康な結合タイプとなった。さらに，アイデンティティ達成が高かったのは「親密群」と「自立群」で，どちらも母からの押しつけ，母への劣等感が低かった。逆に，アイデンティティ達成が低かったのは「反発群」と「葛藤従属群」で，どちらも母からの押しつけ，母への劣等感が高かった。以上のことから，娘のアイデンティティ形成および精神的健康にとって重要なのは，母との分離か結合か，ということではなく，母からの押しつけや母への劣等感を感じない母娘関係であることを明らかにした。

第 3 章では，フォークロージャーからアイデンティティ拡散にアイデンティティ・ステイタスが変化した事例として作家，マーガレット・ミッチェルの伝記分析を行い，その要因を，母娘関係の特徴から検証した。第 3 章における母娘関係の分類で，不健康な結合タイプである「葛藤従属群」に該当すると推測されるミッチェルについて検証した結果，葛藤従属型の母娘関係にある娘

は，母に否定されること，見捨てられることを恐れる「閉鎖型フォークロージャー」（Archer & Waterman, 1990）になる可能性があること，アイデンティティ形成において，自らの主体性よりも母の意志に依存するため，葛藤を内在化させ，目標そのものではなく，母の意志に従う傾向があること，したがって，母の監視下ではフォークロージャーとしての目標に固執するが，母の監視がなくなると，目標を放棄して拡散に退行する可能性があることが示された。さらには，青年期まで自らのアイデンティティについて母に依存し，目標を主体的に選択してこなかった場合，依存対象を失った後，新たな目標を主体的に模索し，選択することができない可能性があることを示した。

ここでは，量的研究で分類した「葛藤従属群」の典型としてミッチェルの事例分析をすることで，量的アプローチと質的アプローチを連携させ，「葛藤従属群」について量的質的両面から理解を深めた。

第4章では，親密で仲のよい母娘関係が娘の健康的な発達に寄与する面に着目し，母親との親密な関係によって，青年期に健康的なアイデンティティを獲得していったと考えられる作家のアガサ・クリスティーの伝記分析を行った。その結果，常に自分の味方であると思わせてくれるような母親の無条件の愛情は，娘の「基本的信頼感」を高め，また，どんなことに対してでも，娘に能力があると信じさせてくれる母親の養育態度は，娘の「有能感」を高めること，そしてそのことは，青年期においては，自分の将来を信じることができるアイデンティティの形成を促進する可能性があることが示された。

また，ロールモデルとしての母を肯定的に評価し，母と親密な関係を持っているクリスティーは，母娘関係としては，健康的な結合タイプである「親密群」（第3章）の特徴を示しており，人格的特徴も「親密群」と共通していることから，「親密群」の典型と解釈された。ここでは，「親密群」の典型としてクリスティーの事例分析をすることで，量的アプローチと質的アプローチを連携させ，「親密群」の特徴について量的質的両面から理解を深めた。

第5章では，母親との親密な関係をもとに青年期にアイデンティティを形成していったクリスティーについて，初期成人期以降のアイデンティティの様相について伝記分析を行った。クリスティーは青年期に思い描いていた通りの結婚をし，母と同様に「幸せな結婚をした女性」というアイデンティティを確立したように思われたのであるが，夫との関係をうまく築くことができなかった。このことから，母親に守られている間は表面化しなかった不健康な人格特性が，母親の支えが得られない状況で，自分の思い通りにいかなくなったときに表面化したと考えられる。その原因として，すべてがうまくいく，自分は愛されている，という「基本的信頼感」が強い一方で，思い通りにいかない，理解されない，という「基本的不信」が低すぎて，他者への共感性が高められなかった可能性があることを示した。さらに，このような人格特性は，娘に「基本的不信」という否定的な方向性を経験させないようにすることによって娘の「基本的信頼感」を高めようとする母親の養育態度によって形成されたのではないかということを考察した。このことは，漸成発達理論における否定的感覚が少ないことによる問題を提起している。

第6章では，量的・質的アプローチとして，伝記資料から対象人物の該当群を推定するための，より説得力のある方法として，質的データを定量化する「伝記資料定量化分析法」の構築を試みた。具体的には，第3章，第4章で分析した青年期のミッチェルとクリスティーを対象に，母娘関係尺度（第2章）の21項目について対象者が青年期後期に回答したと想定して評定し，その結果を，クラスタ分析で得られた4群と比較して，該当する群を推定した。数値化して検討することで，質問紙調査の調査対象者ではない人物の質的データから，該当するクラスタを推定することが可能になり，さらに，研究者間が共通の基準を持って議論ができることから，蓋然性の検証に有効

であることを示した。

第７章では，青年期のミッチェルとクリスティーについて，個別分析による質的検証（第３章，第４章）と，母娘関係尺度を用いて評定した数値（第６章）をもとに，青年期のアイデンティティの様相と，その形成因と考えられる母娘関係について比較分析を行い，母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響について検証した。その結果，娘が，母からの押しつけと母への劣等感によって受動的に従属している母娘関係は，有能感の獲得を阻害するため，その後，青年期のアイデンティティ形成に負の影響を与えること，一方で，母からの押しつけや，母への劣等感を感じず，能動的に従属している母娘関係は，娘の有能感の獲得を促進するため，その後，青年期のアイデンティティ形成に正の影響を与えることを見出した。

以上のことから，本研究の１つめの成果としては，青年期における母親との分離と結合について，それぞれ健康的な側面と不健康な側面があることに着目し，母親からの押しつけや母親に対する劣等感などの精神的不健康に繋がると推察される項目を加えた多次元尺度を作成して母娘関係を検討したことがあげられる。クラスタ分析の結果，母娘関係を論じるために，有効な類型を示すことができた。

２つめの成果は，質問紙調査によるクラスタ分析と，伝記分析を相互補完的に用いて分析することによって，複雑な母娘関係と抽象的な概念であるアイデンティティとの関連をより具体的に検証できたことである。具体的には，不健康な結合タイプである「葛藤従属群」の典型としてミッチェルを，健康的な結合タイプである「親密群」の典型としてクリスティーをとりあげ，根拠資料を用いて分析することによって，統計的に示された両群の一般性を，具体的レベルで検証することが可能になった。関係の近さが特徴とされる母娘関係の分析として，一般性と個別性の両方を把握できるという意味で，非常に意義があると考える。

３つめの成果は，質問紙調査と伝記研究法を組み合わせる，新たな量的･質的アプローチとして，「伝記資料定量化分析法」の構築を試みたことである。この方法により，研究者が定量化された同じ基準を用いて議論することが可能になり，論点が明確になった。また,「葛藤従属群」と「親密群」については，クラスタ分析による他群との比較が可能になり，より客観的で幅の広い分析となった。

４つめの成果は，アガサ・クリスティーの伝記分析を通して，漸成発達理論における否定的感覚が少ないことによる問題を提起したことである。このような，否定的感覚の必要性についての知見は，今後の漸成発達理論の研究に対して，非常に意義があり，本研究の成果であると考える。

主な文献

Archer, S. L., & Waterman, A. S.（1990）. Varieties of identity diffusions and foreclosures: An exploration of subcategories of the identity statuses. *Journal of Adolescent Research, 5*, 96-111.

Edwards, A.（1983）. *The road of Tara: The life of Margaret Mitchell*. New Haven, CT : Taylor Trade Publishing.
（エドワーズ , A. 大久保 康雄（訳）（1986）. タラへの道 ――マーガレット・ミッチェルの生涯――　文藝春秋）

Erikson, E.H.（1950）. *Childhood and society*. New York: Norton.
（エリクソン , E. H.　仁科 弥生（訳）（1977）. 幼児期と社会　みすず書房）

Erikson, E.H.（1959）. *Identity and the life cycle. Selected papers. In Psychological Issues*.Vol.1. New York: International University press.
（エリクソン , E.H. 西平 直･中島 由恵（共訳）（2011）. アイデンティティとライフサイクル 誠信書房）

平石 賢二（2014）. 親子関係　後藤 宗理・二宮 克美･高木 秀明･大野 久･白井 利明･平石 賢二･佐藤 有耕・若松 養亮（編）　新・青年心理学

ハンドブック（pp. 304-314）福村出版
Kroger, J.（1995）. The differentiation of "firm" and "developmental" foreclosure identity statuses: A longitudinal study. *Journal of Adolescent Research, 10*, 317-337.
Kroger, J.（1996）. Identity, regression and development. *Journal of Adolescence, 19*, 203-222.
三好 昭子（2014）. 伝記研究法によるアイデンティティ研究　宮下 博･谷 冬彦･大倉 得史(編) アイデンティティ研究ハンドブック（pp. 41-58）ナカニシヤ出版
水本 深喜・山根 律子（2011）. 青年期から成人期への移行期における母娘関係 ――「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の 4 類型モデル」の検討―― 教育心理学研究 , *59*, 462-473.
Morgan, J.（1984）. Agatha Christie: A Biography. HarperCollins.
（モーガン , J. 深町 真理子･宇佐川 晶子（訳）（1987）アガサ・クリスティーの生涯 上下巻 早川書房）
西平 直喜（1996）. 生育史心理学序説――伝記研究から自分史制作へ―― 金子書房
大野 久（2008）. 伝記研究により自己をとらえる 榎本 博明・岡田 努（編）自己心理学 1　自己心理学の歴史と方法（pp. 129-149）金子書房
Waterman, A. S.（1982）. Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, *18*, 341-358.